学習塾の新時代を切り拓く、塾長歴10年未満の期待の星に聞く

vol.088

疾風の如く

学習支援塾ビーンズ（東京都）

代表 塚﨑 康弘さん

未来を自らの手でデザインする〝学び治し〟の種

これだけ時代が変わっても、なぜ教育現場は変わらないのか。なぜ彼らは自信を失い、彷徨うのか。学校が嫌い。勉強が嫌い。自分の夢も見つからない。自分もそうだったからこそ、分かってあげられることがある。

自分の未来を想像させる「夢・目的を書き出すワーク」

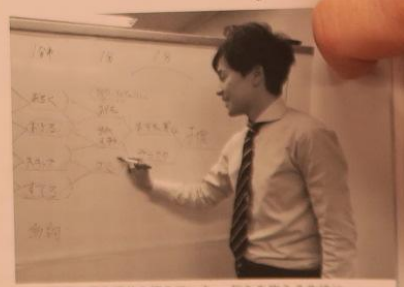
早稲田に入ればすべてうまくいく

塚﨑康弘は、高校が嫌いだった。地方の、一応は進学校と呼ばれるような学校だったが、教師は殴って生徒に勉強を押し付け、生徒たちはストレスの発散場所を求めて、ぎすぎすしていた。

「空気が読めないタイプだったんです」と自嘲する塚﨑。クラスで孤立し、下駄箱を壊されるなどの嫌がらせも受けた。とにかく、学校へ行くのが嫌で嫌で仕方なかったという。

しかし、高校最後の文化祭が大きな転機となる。担任は「うどんの模擬店をやれ」と言ってきたが、それに反発。得意の「空気の読めなさ」を発揮し、密かに仲間数名と創作劇の脚本を書いた。当初は斜に構えていたクラスメイトたちも次第に協力し、文化祭は劇に決定。観客を感涙させる大反響を呼んだ。その成功体験が塚﨑に自信を与えた。

劇以降、クラスの雰囲気は変わった。教室には東京の地図が貼られ、「俺たちは勉強して、東京の大学に行くんだ！」と皆、夢を口にした。そして塚﨑も早稲田を目指す。早稲田に入ればすべてうまくいく、きっと幸せになれる、そう信じていた。



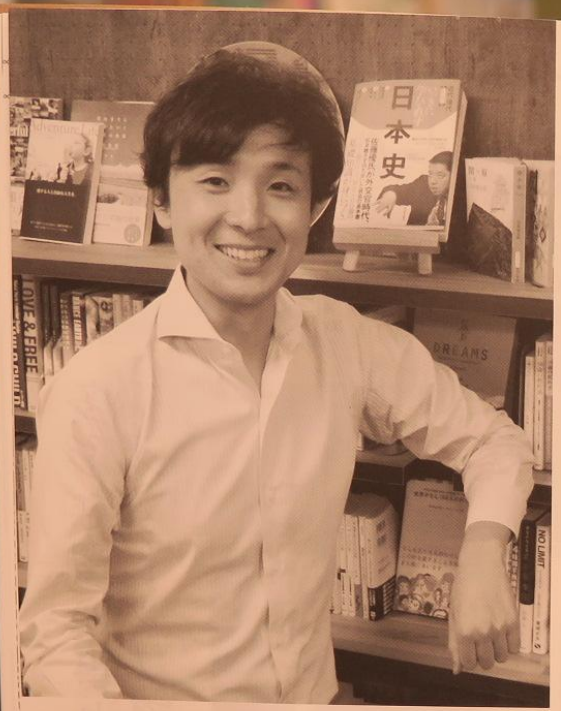
「意識の優先順位を探るワーク」。悩みを抱える生徒に、自分の価値観の源泉を見つけさせる

憧れの大学で不登校

しかし、その反動が来た。無事、早稲田に合格できたものの、典型的な燃え尽き症候群にかかり、あっという間に不登校に。憧れの場所にいるにもかかわらず、「自分は何もできない人間なのではないか」と、布団を被って部屋に引きこもる日々が続いたという。

今度の転機は出会いだった。私淑していた社会学者に会うことができ、その警咳に接した。高校、大学と生きづらさを抱えて過ごしてきたが、それは決して自分だけの問題ではないことを知った。再び大学に通いはじめ、次第に自分に何ができるのか考えるようになった。

就職後に体調を崩して帰郷。いわゆるニート状態に陥るが、塚﨑にとっては大学以来考え続けてきた、「自分に何ができるのか」に答えを出すチャンスだった。そして始めた家庭教師業が塚﨑に「教育で生きていく」決意を固めさせることになる。生徒たちは、「このままでは（受験に）間に合わない」「学校や塾などでの集団教育になじめない」「不登校」など、かつての塚﨑と同じく「何か」を抱えていた。同時に光る個性も持っていた。



もう一度、東京で勝負する

しかし、学校では個性は押しつぶされる。ある生徒は「早稲田に行きたい」と言うや否や、学校の教師から「お前なんかが行けるわけない」と全否定された。町の教育懇談に招かれたが、町の名士は「（問題のある子は）ビシバシやってやればいんだよ！」と言い放った。

同時に塚﨑自身もジレンマに苛まれていた。せめて自分くらいは、もっと生きる意味や学ぶ意味を子どもたちに伝えてやりたかったが、家庭教師として「（受験に）間に合わない」と言われている子を前に、背に腹は代えられず、とにかく勉強をさせた。その豊かな個性を認められながらも、〝勉強させられる〟彼らの虚ろな目を見るにつけ、限界を感じていた。

そのやるせなさは義憤にまで高まり、一念発起。「もう一度、東京で勝負しよう！」。そうして生まれたのが、不登校や勉強嫌いな生徒のための『学習支援塾ビーンズ』だ。

塚﨑は強調する。「うちはフリースクールじゃないんです」。

あくまで子どもたちが社会で活躍する際に必要な「生きる力」を身に付けるための「塾」であることにこだわった。

授業を始める際には、まず「講師が腹を割る」ことが大事だ、と塚﨑。講師たちも自らのバックグラウンドや過去をさらけ出して生徒と信頼関係を築く。『学び〝治し〟の授業』と銘打ち、子どもたちの心の不安を整理しながら彼らの自尊心を回復し、キャリア教育やワークショップを絡めつつ自律心を育て、学習指導を行っていくのだ。その活動は着実に広がり、最近はウェブサイトを見て生徒自ら入塾を申し込んでくる例もあるという。

今後は公教育との連携も含めて活動を広げたいと語る塚﨑。彼のまいた種（ビーンズ）は、いま、空に向かって伸び続けている。（敬称略）

塚﨑 康弘 YASUHIRO TSUKAZAKI

居場所のなかった高校時代を経て、大学でも学ぶ意味を見いだせず不登校に。同時に、そうした自分と同じような生きづらさを抱える子供たちを救えない教育現場に義憤を抱き、「ビーンズ」を設立。「普通」であることを押し付けない教育を大切に、心のケアからキャリア・自律・進学復学支援までワンストップで行う。1985年生まれ、大分県出身。

● WEBサイト
https://study-support-beans.com/

文／松見敬彦（トリガーワークス）

◆爆買い、ネット時代　待ちから攻めへ　多慶屋など◆年間43万人の訪日外国人が訪れるとされる老舗ディスカウントストア、多慶屋（東京・台東）の道を開いたのが電子商取引（EC）の海外販売代行を手掛けるテンソー（同・品川）だ。多慶屋の通販サイトを中国語で表示し、受注した商品の海外発送も代行する。多慶屋は中国語サイトの立ち上げに続き、10月にも認知度向上に向けて中国の交流サイト（SNS）を活用した新たな取り組みに着手する。